

授業研究の様子（E S Dの視点に立った能力や態度を育成するための手立てに沿って）

<導入段階「以前のあさがおの変化を話し合い、本時のめあてをつかむ」>

6月上旬の自分のあさがおの写真と見比べながら観察させることにより、以前との変化に気づかせるようにする。<多様な観点と見通し>

発芽したばかりの6月上旬に、一人一人のあさがおの写真をとっておいた。目の前の自分のあさがお(今のあさがお)と6月上旬のあさがお(以前のあさがお)を見比べることで、どのように成長したかのか具体的に観察することができるようにした。



- 目の前の(今の)あさがおと6月上旬の（以前の）あさがおを、児童は興味を持って見比べていた。「つるがでた」「葉がたくさん出た」「葉っぱの形が変わった」など、たくさん意見が出たので、「つる」「はっぱ」などの観点ごとにまとめて板書した。
- 「枯れている葉っぱがある。」「つるからつぼみがでている」など教師が意図していない意見も出されたが、児童が感じたことなので、すべて認めるようにした。

これからどんなふうに成長していくか予想させた。まず、ペアで交流させた後、身体表現によって一人一人があさがおのつるになりきり、あさがおの気持ちに近づくことができるようにした。

- 葉っぱが大きくなっていく様子だけでなく、どんどんつるが伸びていく様子を、ペアの友達と表現していた。からまる様子は、身体表現でしっかりと実感しているように感じた。3人でつるがからまる様子を表現している児童もいた。
- 小さなつぼみが開くところや、背伸びをして大きく成長するところを表現する児童もいたが、つるの様子に関する身体表現にばかり気を取られ、他の児童に紹介できないのが残念だった。



＜展開段階「あさがおの今後の成長を予想し、どんな世話ができるかを考える。」＞

- ① 観察して気づいたことや予想したことをもとに、あさがおの気持ちを考えさせる。
＜交流と協力＞

1年生の児童の発達段階を考慮して、「現在のあさがおの気持ちを考えさせる活動」を取り入れた。間引きをした際にも、あさがおの気持ちを考えさせていたので無理なくできると思った。また、そうすることで「棒(支柱)を立てたい」などの具体的な世話を話し合うことにつなげていきたいと考えた。



- 「つるがからまって苦しくなる」「つるって大変」「ぐちゃぐちゃになって、おしくらまんじゅうになっちゃう。」など、支柱の必要性につながるあさがおの気持ちを発表する児童が多かった。
- あぶらむしを気にして、「虫が葉っぱを食べるから、葉っぱがなくなっちゃう。」といったあさがおの気持ちを発表する児童もいた。



② 児童からの意見が出た後で、「あさがおからの手紙」を読み、自分たちで決めた考えに納得させたり、もっといい方法はないか考えさせたりする。＜交流と協力＞

これからどんな世話をしていいたらよいか、より具体的に考えることができるようにするため、教師が用意した「あさがおからの手紙」を児童に読み聞かせた。

1 ねんせいのみなさんへ

このまえはまびきをしてくれたので、のびのびとすごせるようになったよ。ありがとう。

でも、こまったことがあるんだ。つるがどんどんのびてきて、となりのあさがおとからまりそうになってきたんだ。それに、なんだかげんきがでないんだ。なんかいいほうほうはないかな。



○ 「あさがおからの手紙が届いたよ。」という言葉に、子どもたちは真剣に耳を傾けて聞いていた。あさがおが困っているということを真剣に感じ取り、何かできることはないかと一生懸命に考えていた。

● これまで話し合ってきた方法には納得しているようだが、もっといい方法という考えには至らなかったようだ。

＜終末段階「自分がこれからできることを決め、あさがおに手紙を書く」＞

○ 「あさがおからの手紙」を聞いた児童は、真剣にこれからどんな世話ができるかを考えていた。実物の支柱を見せたこともあり、半分の児童が、「棒を立ててあげる。」と手紙に書いた。また、今まで実行していた世話の仕方を思い出して、「肥料で元気になってね。」「水をいっぱいあげるよ。」など書いた児童もいた。また、あぶらむしを気にして、「虫よけスプレーをかけてあげる。」と書いた児童もいた。いずれにせよ、「これからもあさがおを大切にしたい。」という気持ちは養うことができたと思う。

● 文字を書くことに抵抗のある児童や手紙形式に慣れていない児童は、書くことをためらってしまったようだ。1は、もっと書きやすい用紙のれない。



年生のこの時期に工夫も必要かもし